

# A Call to Conscience: The Landmark Speeches of Dr. Martin Luther King, Jr.

© The Estate of Martin Luther King, Jr.

## 私には夢がある



8月28日1963  
ワシントン

我が国建国以来最大の、自由を求める運動として歴史に残るであろうこの行進に、こうしてともに参加できることは私の喜びである。

百年前、一人の偉大なアメリカ人が奴隷開放を宣言した。私達今日その偉大な人物の記念堂の前に立っているわけだが、この偉大な宣言はそれまで差別の炎に身を焼かれていた多くの黒人奴隷に、素晴らしい希望の光をもたらした。とらわれの長い暗い夜に終わりを告げる、喜びの夜明けをもたらした。

しかし百年たった今、私達はいまだに自由を手にしてはいない。百年たった今も、悲しいかな、黒人は差別の手かせと偏見のくさりでも動きできないままうちひしがれている。百年たった今も、物質的繁栄の大海のただ中に淋しく浮かぶ、貧困の孤島に住んでいる。百年たった今も、黒人はいまだにアメリカ社会の隅に衰弱した身体を横たえ、自分の祖国にいながらも、他国にさまよう追放者さながらの状態に置かれている。

だからこそ私達は、この許されざる屈辱のありさまを明らかにするために今日ここに集まってきた。ある意味では、小切手を現金に変える目的で、首都ワシントンにやってきたのだ。私達の建国の士達が憲法と独立宣言をみごとな言葉で書き綴った時、彼らはすべてのアメリカ人が遺産として譲り受けるべき約束手形を切った。この手形はすべての人々が、つまり黒人も白人も、すべてのアメリカ人が生命、自由、幸福を追及する侵すことのできない権利を保証するものであったはずなのだ。

しかしアメリカが、黒人に関する限りその債務を履行しなかったのは今日明

口じめる。この仲室は其傍をみつとつたるに、アメリカはての黒人市民に不渡り小切手を与えたのだ。その小切手は資金不足により現金化できないと差し戻されてきた。しかし正義の銀行が破産してしまったなどと私達は決して信じはしない。アメリカが持つ大きな倉に、機会という名の潤沢な資金がないと決して信じはしない。そして今私達はこの小切手を現金とひきかえるためにやってきた。自由という富と正義の保証を引き出しにやってきたのだ。

同時に、私達がこの尊い場所に集まってきたのは、今これがいかに一刻を争う緊急の課題であるかをアメリカ国民に知らしめるためでもあるのだ。冷却期間を置く、などという時間的余裕もなければ、漸次主義という精神安定剤でこの場を繕っておくこともできない。今こそが民主主義の約束を実現する時なのだ。今こそ、暗い、荒涼とした差別の谷から立ち上がり、差別撤廃の陽の当たる道へと進まなければならない。今こそ人権差別の流砂から私達の国を救い、強い人類愛のいわおへと導く時なのだ。すべての神の民が実際に正義を手にする時なのだ。これがいかに急を要するかを認識しないならば、この国には破滅が来るだろう。黒人市民の正当な不満がうずまく暑い夏は、自由と平等のすがすがしい秋が来ないかぎり決して過ぎ去ることはないだろう。

1963年は終わりではなく始まりである。「黒人には欲求不満のはけ口が必要だただけなのだ、そのうちおさまり、何事もなかったようになる」と思い、希望する人々は、決してそうではないことに驚愕し、目覚めることだろう。黒人が市民としての当然の権利を獲得するまで、アメリカに真の平静と安泰は来ないのだということに目覚めることだろう。輝かしい正義の夜明けが来るまで、動乱の嵐はこの国のいしずえを揺るがし続けるのだ。

しかし正義の宮殿の前の、すりへった敷居にたたずむ同胞に伝えなければならない。当然の権利を得る過程で間違いをおかしてはならないことを。自由

への渴望を憾みの水で癒してはならないことを。私達の苦闘は、いつの日も尊厳と規律という高いレベルで行うべきであることを。この新しい社会創造のための反抗 (creative protest) を暴力ざたにおとしめることのないように。幾度でも幾度でも、肉体の力を魂の力で凌駕する、卓越した境地に自らを置かなければならないことを。

黒人社会を炎のように包んでいる私達の新しくめざましい士気が、白人すべてに対する不信感となってはならない。なぜなら、たくさんの白人市民が今ここに私達と共に集まっていることが示すように、白人も自分達の運命が私達の運命と切り離せないということを悟っているのだから。彼らの自由も、また私達の自由とほどけない糸で結ばれあっていることがわかっているのだから。私達は一人では歩けない。そして歩きながら、いつも前を向いて歩け、と心に言い聞かせるがよい。戻ることはできないのだから。

熱心な公民権運動家にこう尋ねる人々がいる。「いつになったら君達は満足するのかね」と。黒人市民が警察の横暴という筆舌につくしがたい脅威の犠牲者であるかぎり、満足はできないのだ。旅で疲労困憊した身体を引きずっていてもハイウエーや町のホテルにその身を休めることができないという状態が続く限り満足はできないのだ。黒人が米国社会で自由に動けるといえば、小さな貧民窟から大きな貧民窟へ移れるだけだという状況が変わらない限り満足することはないのだ。私達の子供達が「白人用」と書いた立て札によって、その人格を否定され、尊敬を剥奪される限り満足することはないのだ。ミシシッピの黒人が投票できず、ニューヨークの黒人が投票しても何になるのか、と感じる状態が続く限り満足はできないのだ。私達は満たされてはいない。正義と平等が大河の水のようにとうとうと、よどみなく流れるまで決して深たされることはないのだ。

貴方達のなかに今迄多くの苦悩や艱難をへて、ここへやってきた人々がいることを私は忘れてはいない。なかには刑務所の小さな檻のなかから駆け付けた者もいるだろう。自由を求めたが為に迫害の嵐に打ちのめされ、警察暴力の嵐にたたきつけられるような地域からきた人々もいるだろう。あなたたちは創造のための苦しみの経験者なのだ。不当な苦しみは購われるのだという信念をもって歩みつづけるがよい。ミシシッピに、アラバマに、戻るのだ。サウスカロライナにジョージアにルイジアナに北部の町のスラムやゲッターに戻るがよい。この状況を変えることができるのだと、そして変わるのだと信じて帰るがよい。絶望の谷にさまようのはもうやめよう。

私は同胞達に伝えたい、今日の、そして明日の困難に直面してはいても、私にはなお夢がある。それはアメリカンドリームに深く根ざした夢なのだ。つまり将来、この国が立ち上がり、「すべての人間は平等である」というこの国の信条を真実にする日が来るといふ夢なのだ。私には夢がある。ジョージアの赤色の丘の上で、かつての奴隷の子孫とかつて奴隷を所有した者の子孫が同胞として同じテーブルにつく日がいつかくるという夢が。私には夢がある。今、差別と抑圧の熱がうずまくミシシッピ州でさえ、自由と正義のオアシスに生まれ変わり得る日がくるという夢が。私には夢がある。私の四人の小さい子供達が、肌の色ではなく内なる人格で評価される国に住める日がいつかくるという夢が。

私には今夢がある！

人権差別主義者や州知事が連邦政府の干渉排除主義を唱え、連邦法の実施を拒否しているアラバマ州にさえ、将来いつか、幼い黒人の子供達が幼い白人の子供達と手に手をとって兄弟姉妹となり得る日がくる夢が。

私には今夢がある！

いつの日にかすべての谷は隆起し、丘や山は低地となる。荒地は平になり、歪んだ地もまっすぐになる日がくると。「そして神の栄光が現われ、すべての人々がともにその栄光を見るだろう。」

これが私達の希望なのだ。この信仰をもって私は南部へ戻っていく。この信仰をもってこそ絶望の山からも希望の石を切り出すことができるのだ。この信仰をもってこそ私達は祖国にうずまく不協和音を人類愛のすばらしい交響曲に昇華することができるのだ。この信仰をもってこそ、自由がいつか来るのだということを信じながら、私達は共に働き、共に祈り、共に苦しみ、共に投獄され、共に自由のために立ち上がることができるのだ。そしてその日がくれば、その日がくれば神の民はみなおしなべて、新しい意味をこめて歌えるのだ。「我が祖国よ、美しい自由の国を讃え私は歌う。父が骨を埋めた国、開拓者の誇りとする国。すべての山々から、自由よ鳴り響け」と。真にアメリカが偉大な国となるためには、これが実現しなければならない。

ニューハンプシャーの山々の偉大ないただきから自由の鐘を鳴らそう。ニューヨークの悠々しき山々からも、ペンシルバニアにそそりたつアレゲニーの山からも、自由の鐘を鳴らそう。雪を頂くコロラドのロッキー山脈からも、カリフォルニアの、なだらかな山々からも自由を鳴り響かせるのだ。それだけではない。ジョージアのストーンマウンテンからも、テネシーのルックアウトマウンテンからも、ミシシッピのすべての丘やほんの小さな塚からも、「すべての山々から、自由の鐘を鳴らす」のだ。そうすれば、私達が自由を鳴り響かせば、すべての村すべての集落から、すべての州、すべての町から自由の鐘を鳴らせば、すべての神の民が、黒人も白人も、ユダヤ人も、非ユダヤ人も、プロテスタントもカトリックも、すべての人々が手に手をとって古い黒人霊歌を共に歌える日がより早くやって来るのだ。“Free at last, free at last; thank God Almighty, we are free at last.” 「やっと、やっと自由になれた。全能の神に感謝。やっと自由になれたことを」と歌える日が。

---

木山ロリンダ様と斎藤真由美様には、マーティン ルーサー キング ジュニア ペーパープロジェクトの翻訳にご協力頂きましたことを感謝いたします。

| [Home](#) | [Papers](#) | [Speeches](#) | [Sermons](#) | [Autobiography](#) | [Biography](#) | [Chronology](#) | [Articles](#) | [About the Project](#) |  
| [Internships](#) | [Supporting the Project](#) | [FAQ](#) | [Contact Us](#) | [Links](#) | [Site Map](#) |